

『イーリアス』9歌におけるディオメーデース像 ——アキレウスとの対照性——

大見山貴宏

はじめに

『イーリアス』におけるディオメーデースは、作品前半において最も活躍する英雄であるが、彼がどのような役割を果たしているのか、という議論は十分になされてきたとは言えない。しかし、作品全体における前半部分の意義を明らかにする上で、彼の役割は見過ごすことができないと考えられる。

彼の役割を考察する上で注目にはずすのは、作品の重要なテーマの一つである「アキレウスの怒り」である。ディオメーデースは様々な形でアキレウスと対応、対比させられることによってこの「怒り」の物語に寄与しており、作品に不可欠な効果をもたらしている。

ディオメーデースは9歌においても活躍を見せるが、その役割がアキレウスとの関係の中で焦点を当てられることは少ない。これに関して、古注では、ディオメーデースは「常にアキレウスの対抗者として見出される」とある¹。Andersen (1978) は、アキレウスに次ぐ英雄とされたディオメーデースが、彼と相反する性格を有する点に作者の意図を認める。そして、両者の相違が9歌において浮き彫りになると述べる²。Hainsworth (1993) は、ディオメーデースをアキレウスと似た人物としつつ、彼がアガムメノンの地位への意識を保っているとする³。Griffin (1995) は、ディオメーデースがアガムメノンの侮辱に対しアキレウスほど怒ることがなく、名誉回復の機会を待つ覚悟ができていているという点に、アキレウスとは対照的な英雄像を見出す⁴。しかし、以上のような、両者の性格的、性質的な相違を指摘するに留まらず、両者の対応や対比を「アキレウスの怒り」と

¹ Erbse (1971), p.544, A Scholia ad 9.698.

² Andersen (1978), p.10. Andersenによれば、ディオメーデースはアキレウスのような深刻さや悲劇性を持たず、4歌ではアガムメノンに忠実であり、8歌ではネストールを助け、常に助言と行動で方策を探っており、アキレウスと全く異なるタイプの人物である。ただし Andersen は、ディオメーデースについて考察する上で、彼とアキレウスの関係を重視しているわけではない。Cf. p.11.

³ Hainsworth (1993), p.149, p.264. Hainsworthによれば、ディオメーデースは、演説 (9.697-709) に見られるように、自信に満ちた戦士という点でアキレウスの分身だが、アガムメノンの地位への意識を保っている。

⁴ Griffin (1995), p.4, pp.78-79. アガムメノンはディオメーデースを臆病であるとして叱責したが (4.370-400)、ディオメーデースはその時点では言い返すことなく、9歌で反論に成功している (9.32-49)。

いう名誉をめぐる物語と関連付け、その中でディオメデースが担う機能に注目することが作品理解の上で有意義と思われる。

アキレウスとディオメデースは、それぞれアガムノン体制の不承認／承認によって、アカイア勢という社会の外／内に身を置いているという対比を示している⁵。誰よりも激しくアガムノンの権威を否定したのがアキレウスであり、彼はこれによって値打ち乃至名誉 *τιμή* を傷付けられて退陣した⁶。こうして彼の「怒り」の物語が幕を開けた。一方ディオメデースは、アガムノンによって値打ち *τιμή* の危機にさらされた際 (4.410)、アカイア勢の頂点に立つ者としてのアガムノンの立場を明瞭に説明し、これを積極的に肯定して出陣した (412-418)⁷。この対比的な描写が、それぞれ異なる場所に置かれた両者をめぐる壮大な物語展開の始点となる⁸。

9 歌開幕に至るまでの両者の対比を概観すると、以下のようになる。すなわち、アキレウスが「怒り」の中で「人々に栄光 (*κῦδος*) を与える」(*κυδιάνειρα* 1.490) とされる「集会」(*ἀγορή*) にも戦場にも行かなかったと語られる一方、ディオメデースは戦闘初日において、女神アテーネーから戦場における「優れた名誉」(*κλέος ἐσθλόν* 5.3) を約束される。そして、彼は他ならぬアキレウスと対応する役割を果たしながら⁹、パンダロスを討ち、アイネイアスを負傷させるといった「栄光」(cf. *κῦδος* 5.225, 260) を得た。ディオメデースはそのまま「集会」(*ἀγορή* 7.382) で演説 (400-402) し、トロイア攻略への意気込みを見せる。この演説は「彼がこう言うと、アカイア人の子らは全て喝采の声を上げた、馬を馴らすディオメデースの言葉に感嘆して」(*ὡς ἔφαθ'· οἱ δ' ἄρα πάντες ἐπίαχον υἷες Ἀχαιῶν, / μῦθον ἀγασσάμενοι Διομήδεος ἵπποδάμοιο* 403-404)

⁵ これはアキレウスが完全に「社会」との関係を断ったという意味ではない。本稿では、彼がアガムノンを頂点とする体制を拒否した上で、戦場や集会のような「社会的」空間に出て他のアカイア勢と行動を共にすることがない、という点を指して「社会の外」にいると表現している。アキレウスはこのような形で彼らとは異なる英雄像を示してゆき、ディオメデースとは正反対の姿となっている。

⁶ Cf. 小川 (2021), 206 頁。アカイア勢 (ギリシア軍) という社会をめぐる論としては、Gould (2001), pp.335-358, 小川 (2021), 192-227 頁。

⁷ アキレウスとディオメデースに対するアガムノンの仕打ちはそれぞれ異なっているが、いずれも値打ち *τιμή* をめぐる問題として描かれる。更に、オデュッセウスがアガムノンの叱責に反発し (4.350-355)、ステネロスも *τιμή* の扱いに不満を述べる中 (404-410)、ディオメデースはステネロスを叱責し、飽くまでアガムノンの立場を尊重している。

⁸ アガムノンに対するアキレウスとディオメデースの態度が対照的であると論じられている。Cf. Griffin (1980), p.74, id. (1995), p.4, Edwards (1987), p.198, Taplin (1992), pp.135-136, Pratt (2009), p.148. 本稿では更に、これを両者の対比的な名誉の性質をめぐる物語展開の始点とみなす。

⁹ 両者とも女神アテーネーの助けを受けている点や、アイネイアスと戦う点などは著名な対応点である。

と称賛され、彼は「集会」においても「栄光」(κῦδος) を得ることになった¹⁰。この時点で、戦場にも集会にも行かなかったとされるアキレウスと、双方で「栄光」を得たディオメーデースという対比が完成したと言える。

このように、9 歌開幕に至るまでは、ディオメーデースが戦場でも集会でも名誉を獲得し、飽くまでトロイア攻略を目指すのに対し、アキレウスは不名誉を蒙ったまま「怒り」を抱え続け、英雄としての活動を一切行わないという対照性が見られた。しかし、アカイア勢は 8 歌において劣勢に陥ったため、9 歌では、アガムメノンたちがアキレウスとの和解を模索するようになる。

本稿では、以上に見られた、「アキレウスの怒り」という物語における両者の対照性、とりわけアカイア勢という社会の内／外に置かれた両者の名誉をめぐる対比に焦点を当て、9 歌のディオメーデース像について考察する。その結果、従来述べられてきた、アキレウスと性格、性質を異にするという以上のディオメーデース像が明らかになると思われる。それはアカイア勢のうちで最も特異な英雄像を示すアキレウスの姿を際立たせるものでもある。

第 1 章 「我ら二人」をめぐる対比

9 歌は、アガムメノンが帰国を提案し、それにディオメーデースが反論する場面から始まる。本章では、その台詞 (9.46-49) に見える彼とアキレウスの対照性について考察する。

ディオメーデースは、帰国を提案するアガムメノンに反対する演説を行うが、その際、自身を臆病者として非難したアガムメノンの叱責 (4.370-400) に言及し、逆に相手の臆病さを指摘することに成功している (9.34-39)。そして、台詞を以下のように締めくくる。

ἀλλ' ἄλλοι μινέουσι κάρη κομόωντες Ἀχαιοί,
εἰς ὃ κέ περ Τροίην διαπέροσμεν. εἰ δὲ καὶ αὐτοί
φευγόντων σὺν νηυσὶ φίλην ἐς πατρίδα γαῖαν,
ναῖ δ', ἐγὼ Σθένελός τε, μαχησόμεθ' εἰς ὃ κε τέκμαρ
Ίλίου εὕρωμεν· σὺν γὰρ θεῶι εἰλήλουθμεν. 9.45-49

¹⁰ κῦδος は成功に伴う威光といった類の名誉であり (cf. Redfield (1975), p.33)、「集会」(ἀγορή) は「人々に栄光 (κῦδος) を与える」という形容辞を付される語であるため、ディオメーデースが「集会」において称賛を得たことは「栄光」(κῦδος) であると見ることが出来る。なお、本文は West (1998, 2000) のトイプナー版、訳は既存のものを参照した拙訳を用いる。

しかし、他の髪長きアカイア勢は留まるであろう、
我らがトロイアを滅ぼすまでは。さあ彼ら自身すらも、
船に乗って愛しき故郷へ逃げていくがよい。
だが我ら二人、私とステネロスは戦うぞ、イーリオスの
終焉を見出すまで。我らは神と共に来ているのだから。

この箇所は、ヘクトール率いるトロイア勢がいよいよアカイア勢の船陣に迫る中、16歌において、出陣の許可を願う親友パトロクロスに対してアキレウスが述べた言葉との対応や対照が指摘されている¹¹。

αἶ γάρ, Ζεῦ τε πάτερ καὶ Ἀθηναίη καὶ Ἀπολλων,
μήτέ τις οὖν Τρώων θάνατον φύγοι, ὅσσοι ἕασιν,
μήτέ τις Ἀργείων, νῶϊν δ' ἐκδυίμεν ὄλεθρον,
ὄφρ' οἶοι Τροίης ἱερὰ κρήδεμνα λύωμεν. 16.97-100

どうか父なるゼウス、アテーナイエー、アポローンよ、
在る限り全てのトロイア人のうち、誰もが死を逃れませんように。
アルゴス勢のうち誰もまた。ですが我ら二人からは破滅を免れさせて下さい、
ただ我らだけが、トロイアの戴く聖なる囲壁を滅ぼすことができるよう。

両者はいずれも「我ら二人」(νῶϊ) だけがトロイアを攻略する、という趣旨の発言をなしているが、「アキレウスの怒り」という物語におけるディオメデースの機能という観点からは、彼が演説を行った場が「集会」(ἀγορή) であると繰り返し言及される (9.11, 13, 33)¹² ことが注目に値する。「集会」は「人々に栄光 (κῦδος) を与える」(κυδιάνειρα 1.490) と形容され、極めて社会的な空間である。ここにアキレウスとの対比が見られる。ディオメデースが演説を行った後、アカイア勢は歓呼を以て彼を称える。

ὦς ἔφαθ'· οἱ δ' ἄρα πάντες ἐπίαχον υἷες Ἀχαιῶν,
μῦθον ἀγασσάμενοι Διομήδεος ἱπποδάμοιο. 9.50-51

¹¹ Lohmann (1970), p.222, Andersen (1978), pp.119-120, Macleod (1982), p.25, Edwards (1987), p.217, Griffin (1995), p.80.

¹² 今回が全軍の集会であるのに対し、以降のネストールによる使節派遣の提案や、ディオメデースによるアキレウスへの非難などは将たちの会議でなされた。Cf. Hainsworth (1993), pp.59-60, p.70, Griffin (1995), p.86.

彼がこう言うと、アカイア人の子らは全て喝采の声を上げた、
馬を馴らすディオメーデースの言葉に感嘆して。

この二行は、7 歌におけるディオメーデースの発言 (7.400-402) を聞いたアカイア勢の反応を示す詩行 (403-404) と同じである。全軍はディオメーデースの演説をまたも歓呼の声で迎えている。ネストールが具体策の提案 (9.65-78) を行ってその演説に補足を加えているが、ディオメーデースはあらためて「栄光」(κῦδος) を得ることとなった。

この一方、アキレウスの発言は当然ながら集会におけるものではなく、聞き手であるパトロクロスにしか打ち明けられない内容を彼一人に対して語っている。この場面のアキレウスに関して、彼は「絶対の栄光」を要求しながら¹³、評価者の存在によって初めて成立するという、名誉を持つ社会的性質のためジレンマに陥っているとされる¹⁴。また、次章で論じるように、アカイア勢という社会の中で名誉を傷付けられて「怒り」を抱える彼は、その社会への復帰を強く拒絶している。上述の 16 歌における発言は、そのような戦士の葛藤がよく表れている。そして、その対極にいる存在がディオメーデースであると言える。すなわち、彼は戦場で名誉を獲得し、集会でも再び全軍の称賛を受けた。その内容も、皆を激励し、トロイア攻略という戦場での栄光を現実的に目指そうとするものであった。彼はアカイア勢という社会に疑問を抱くことなく、次々と成功を収めてきた英雄である¹⁵。そして、今また集会という社会的な空間で称賛を浴びた上で、更なる栄光を目指している。アキレウスはこれに対して、「怒り」によって彼が関係する社会全てが滅び去ることを願い、「絶対の栄光」を得ようとしており、そのことをパトロクロス一人に打ち明けている。以上は、集会で栄光を得たディオメーデースと、「怒り」によって集会に出ることのないアキレウスという、これまでに見られた対比が深刻化したものと見ることができる。

Griffin (1995) は台詞の対応を示す両者に関して、アキレウスを「誇大なディオメーデース」(an exaggerated Diomedes)¹⁶ とみなしているが、ここは規模の大小を見るべきではなく、以上考察してきたような、名誉をめぐる両者の根本的な相違に注目すべきである。

第2章 アキレウスの名誉

ネストールの提案 (9.96-113) によって、アキレウスのもとへ使節が派遣され、その戦線復帰と引き換えに莫大な品々が約束されるものの、彼は和解を拒否する。その中で、

¹³ 川島 (1991), 150 頁。Cf. Whitman (1958), p.199.

¹⁴ 川島 (1991), 150-152 頁、同 (2023), 62-65 頁。Cf. Janko (1992), p.328.

¹⁵ Cf. Taplin (1992), p.135.

¹⁶ Griffin (1995), p.80.

一度名誉を奪われ、「怒り」を抱えてきたアキレウス独自の名誉の在り方が提示される。本章では、こうしたアキレウスの名誉をディオメーデースのそれとの対比の中で考察する。

第1節 τιμή をめぐって

アキレウスは、戦線復帰と引き換えに莫大な品々を約束するオデュッセウスたちを前に、アガメムノン体制のもとで自らの武功が正しく報いられることはなかったとして、以下のような認識を述べる。

ἴση μοῖρα μένοντι, καὶ εἰ μάλ᾽ αὖ τις πολεμίῳι,
ἐν δὲ ἰῆ τιμῆι ἤμην κακὸς ἦδὲ καὶ ἐσθλός· 9.318-319

引っ込んでいようと、大いに戦おうと、分け前は等しく、
臆病な者も、勇敢な者も、同一の値打ちにある。

作中における「値打ち」(τιμή)とは、アキレウスが1歌において、名誉となる実体的な褒賞 γέρας としてのブリーセーイスをアガメムノンに奪われることで傷つけられた「名誉」や「地位」であるため、本人が持つ実体的価値とも密接に関わっている¹⁷。アキレウスは、アガメムノンを中心とする社会にあって、自らの褒賞を奪われる形で不名誉を蒙った。かくして、先行研究で指摘されているように、「分け前」という実体的価値の所有に基づく不安定な名誉の在り方を彼はもはや支持していない¹⁸。彼の言葉は、作中において一般的な英雄の価値体系から根本的に断絶しているとも論じられる¹⁹。

また、「分け前」をめぐるアガメムノン体制の問題については、アキレウスが既に1歌で述べている。アカイア勢という社会においては、身分や義務を明確に定める用語がなく、戦士の上下関係は曖昧である²⁰。このような中で、アキレウスは自らの働きに比して褒賞 γέρας が少なく、自らが「名誉 τιμή がない」(ἄτιμος 1.171) 状態であるとして、武勇や働きの点で劣るアガメムノンがより多くの褒賞 γέρας を得ることに不満を述べている (163-171, 225-232)。そして、彼はアガメムノンの立場を認めることなく、口論の結果、ブリーセーイスを奪われるという不名誉を蒙ることになった。

これに対して、ディオメーデースはアガメムノンによって値打ち τιμή の危機にさ

¹⁷ 社会的、具体的価値としての名誉については、Schein (1984), pp.70-71, 川島 (1991), 47-49 頁。

¹⁸ Cf. Whitman (1958), pp.191-192, Griffin (1980), pp.99-100, Schein (1984), p.71, pp.105-106, 川島 (1991), 123-124 頁、同 (2023), 53-55 頁。

¹⁹ Schein (1984), p.105.

²⁰ Gould (2001), pp.337-343, 小川 (2021), 206 頁。

らされながら、彼を軍の頂点に立つ者として認め、その叱責を甘受した (4.412-418)。そして9歌においては、アガメムノーンの臆病さを指摘しつつも、皆に勝る彼の地位 $\tau\mu\eta$ を承認している (9.38-39)。また、武功を立てたディオメーデース自身の $\tau\mu\eta$ は8歌において言及される。敵将ヘクトールの発言の中においてではあるが、ディオメーデースの実体的価値に基づく名誉 $\tau\mu\eta$ に関して、彼はアカイア勢から「上座と肉と満ちた酒杯でもって」($\epsilon\delta\theta\eta\iota\ \tau\epsilon\ \kappa\rho\acute{\epsilon}\alpha\sigma\iota\upsilon\ \tau\epsilon\ \iota\delta\acute{\epsilon}\ \pi\lambda\epsilon\iota\omicron\iota\varsigma\ \delta\epsilon\pi\acute{\alpha}\epsilon\sigma\iota\upsilon$ 8.162) 名誉 $\tau\mu\eta$ を与えられていたとされる。ここでは、優れた戦士が戦場で武功を立て、社会的、実体的価値としての名誉 $\tau\mu\eta$ を享受するという、作中において一般的な英雄像が印象付けられる²¹。

一方、アキレウスは昼夜を問わず戦い続けたものの、報われることがなかったと嘆いている (9.321-327)。また、これまで船に乗って十二の都市を、トロイアの至る所で十一の都市を滅ぼし、莫大な財宝を奪ったものの、褒賞 $\gamma\acute{\epsilon}\rho\alpha\varsigma$ の多くはいつもアガメムノーンが掌握し、今やブリーセーイスすら奪ってしまったと述べる (328-336)。アキレウスが語る自らの武功からは、彼がかつてはディオメーデースの如く、戦場における名誉の追求に明け暮れる英雄であったことが明かされる。しかし、アカイア勢という社会はアキレウスの働きに「正しく」報いることができるような場ではなかった。彼はもはや戦士たちの社会に戻ろうとはせず、そこで自身が味わったアガメムノーンの「狼藉」($\lambda\acute{\omega}\beta\eta$) も物質的には償われ得ないと考える (378-387)。以上のアキレウスは、ディオメーデースがアカイア勢という社会の価値体系を承認し、名誉を追求していく姿とは正反対の在り方を示している。ディオメーデースがアガメムノーン体制の下で戦い続ける一方、戦場から隔たった場所では、アキレウスがそのような在り方を拒否することになった。

第2節 κλέοςをめぐる

アキレウスは、アガメムノーンたちが約束する実体的な品々が自らの命と釣り合うとは考えず (9.401-409)、それに値するものは「不滅の名誉」($\kappa\lambda\acute{\epsilon}\omicron\varsigma\ \acute{\alpha}\varphi\theta\iota\tau\omicron\nu$ 413) なのだとして述べる。彼は、母テティスが述べているという自身の運命を伝える中でこれに言及している。

εἰ μὲν κ' αὖθι μένων Τρώων πόλιν ἀμφιμάχωμαι,
ὄλετο μὲν μοι νόστος, ἀτὰρ κλέος ἄφθιτον ἔσται. 412-413

もし私がここに留まってトロイア人の城市を囲んで戦うなら、
私の帰郷こそなくなってしまうが、不滅の名誉があることになる。

²¹ 8.162はサルペードーンの有名な台詞にも現れ (12.311)、戦士社会に根を下ろしたディオメーデースの英雄像を印象付けるものとなっている。

ここで用いられる κλέος は、死後も残る評判を指し、英雄が詩歌によって得る名声がこれに該当する²²。トロイア戦争の κλέος が不滅であることに関しては、既にカルカースが「預言をして」(θεοπροπέων 2.322) 語っているが (325)、更にここでは、女神であるテティス自身の予言として、アキレウスの κλέος が不滅であるとされている。このように、彼が最終的に得る名誉として「不滅の名誉」(κλέος ἄφθιτον) が挙げられ²³、それがいかなるものかは、以下に述べるように、ディオメデースのそれと性質的に対比されることによって示される。

現時点におけるアキレウスは、アガメムノン体制の下に復帰しようとは思わず、帰郷しようとし (356-363)、トロイア攻略も不可能だろうと述べている (418-419)²⁴。しかし、今の彼の意識はともかく、今後の物語を知る作品の享受者に対して提示される「不滅の名誉」は、以下のようなものと考えられる。まず、「分け前」(9.318) などの実体的名誉も κλέος と関係するが²⁵、アキレウスが得る κλέος は自身の戦死を伴うため、その次元に留まらない性質を思わせる。また、このような「名誉」である以上は社会性を伴うものの、「不滅」と言われることで、作中の社会に限定されず、「後代」の聴衆が関わって成立するという κλέος の側面が強調される。彼らの関わり方は、他ならぬアキレウス自身が示している。彼はアカイア勢という社会から離れた後、「人々の名誉」(κλέα ἀνδρῶν 189) を歌って心を楽しませ、そうした物語から慰めを得ていたのであった²⁶。そして、今度は彼自身の物語が語り継がれる対象となり、彼の κλέος は作品外の世界において成就するものとされる。次章で見られるように、9 歌におけるアキレウスは、作中社会においてはディオメデースをはじめ誰の理解も得られなかった。しかし、アキレウスの物語は、κλέος ἄφθιτον という表現によって、作中社会を超えて聴衆に働きかける性質が強く打ち出されている。

一方で、当のアキレウス自身は、今は自らが妥当と思える名誉をアガメムノンたちからは期待できず、彼らの贈り物を得ることによる名誉が自らを動かすのに相応しいとは考えない。彼はもう一つの運命を語る。すなわち、故郷へ帰るならば、

²² Cf. Redfield (1975), pp.30-35.

²³ 『イーリアス』という作品自体が κλέος ἄφθιτον という言葉で示されている。Nagy (1979), p.29, id. (2013), p.26.

²⁴ アキレウスは「御身らがもはや陰しきイーリオスの終焉を見出すことはない故 (ἐπεὶ οὐκέτι δῆε τε τέκμωρ / Ἰλίου αἰπεινῆς)」(418-419) 他の者たちにも帰郷をお勧めする、と述べる。これは先程の「イーリオスの終焉を見出すまで (εἰς ὃ κε τέκμωρ / Ἰλίου εὐρωμεν)」(48-49) 戦う、とするディオメデースの言葉と対比される。

²⁵ Cf. Redfield (1975), p.33, Schein (1984), p.71.

²⁶ 詩歌の効果については Macleod (1982), pp.1-8, 川島 (1991), 118-120 頁。悲しみの忘却という物語 κλέος の効用についてはヘーシオドス『神統記』94-103 にも見られる。

ᾠλετό μοι κλέος ἔσθλόν, ἐπὶ δηρὸν δέ μοι αἰών. 415

私の優れた名誉はなくなってしまうが、私には寿命が長くあることになる。

しかし、彼が帰郷することは結局なかった。それは英雄として不可能な選択であった。ここでは「優れた名誉」(κλέος ἔσθλόν) が、上述の「不滅の名誉」(κλέος ἄφθιτον) と対応していることが分かる。

この「優れた名誉」(κλέος ἔσθλόν) はディオメーデースの武功を表す言葉でもある。女神アテネーは5歌の冒頭において、ディオメーデースが「優れた名誉を得るために」(ἴν'... κλέος ἔσθλόν ἄροίτο 5.2-3) 彼に力と勇気を授けた。彼は対パンドロス、アイネイアース戦の際、もしアイネイアースが持つ二頭の駿馬を獲得するなら、「我らは優れた名誉を得るであろう」(ἀροίμεθα κέ κλέος ἔσθλόν 273) とステネロスに述べ、結果その奪取に成功した(319-327)。ディオメーデースの「優れた名誉」(κλέος ἔσθλόν) として明示されているものは、駿馬という実体的価値であり、それを戦場という「社会的な」空間において獲得したことであった。この「優れた名誉」が、名誉か命かという運命の選択が語られる中で、上述の「不滅の名誉」というアキレウス独自の主題と対応している。物語が進行し、パトロクロスの死が伝えられると、アキレウスは新たな「怒り」に燃え、結局出陣の決意を固める。そのとき、母テティスからは、「ヘクトールの後すぐに、死がお前を待ち構えているのだぞ」(18.96) と警告される。しかし、アキレウスは死の運命を受け入れるとした上で、「ですが、今は優れた名誉を得たく思います」(νῦν δὲ κλέος ἔσθλόν ἀροίμην 121) と述べる²⁷。したがって、アキレウスの「優れた名誉」は22歌におけるヘクトールの打倒を含み、これは自身の死を伴う武功、すなわち先程の「不滅の名誉」であった。

ディオメーデースとアキレウスの武功は、いずれも「優れた名誉」(κλέος ἔσθλόν) であるとして対応させられ、当然戦場という「社会的」空間において生じたものである。しかし、これもアカイア勢という社会の内／外に置かれた両者の対比的状況と深く関わっている。すなわちディオメーデースは、アガムノン体制を積極的に受け入れ、その社会の中で戦友ステネロスと共に武名を挙げようと決意した(4.412-418)。一方アキレウスは、アガムノン体制を拒否し、その社会から外れてゆく中、最も深い関係で結ばれていた親友パトロクロスを失ったため、命と引き換えであってもその仇を討とうと決意した(18.98-126)。両者の武功は、以上のような対照的な決意の結果として生じたも

²⁷ この箇所は上述の予言を暗示していると指摘されている。また、9歌で戦線復帰の結果として予言されたアキレウスの死が、一連の出来事によってヘクトール殺害と一層直接結び付けられているとされる。Taplin (1992), pp.197-198.

のであった。そして、アキレウスの名誉 κλέος が武功という「社会的」空間において生じるものに留まることはなく、物語は大団円を迎えることになる。

アキレウスの「不滅の名誉」は、ヘクトールの打倒という武功のみならず、24 歌におけるプリアモスとの和解をも包含している。これは作品の大団円にあたり、ヘクトールと（作品外における）アキレウスの死の間に置かれた物語である。アキレウスはヘクトールを討った後、その遺体を痛めつけていたが、神々の意思に従って遺体の返還に応ずる。そして、プリアモスが自ら彼のもとを訪れてその返還を願う。老王はアキレウスに嘆願し、故郷に残された父ペーレウスを想うよう、そして我が子を殺され、その殺し手に嘆願せざるを得ない自らを憐れむよう哀訴する (24.486-506)。アキレウスは、父や親友を想う中で彼を憐れみ (511-516)、その苦しみと共感する (518)。ヘクトールを討つべく出陣してしまった以上、自らも時ならず最期を遂げる運命にあり、老父には跡継ぎも、世話をしてくれる息子もいないという状態なのである (538-542)。二人は互いに対する敬意の中、食事を共にして和解を果たす (627-632)。更に、アキレウスが仇敵の葬儀にまで協力を申し出たことで (656-658)、両者の会見は身の代と遺体の交換という、既に定められていたシナリオ (103-140) を超えた、憐れみと共感による和解となった。アキレウスが嘆願者プリアモスに示した雅量は、「栄光」(κῦδος 110) と表現されている²⁸。これはディオメデースの戦場や集会における「社会的」栄光とは対照的に、アカイア勢という社会からは異質な陣屋における「栄光」であった²⁹。この後アキレウスとプリアモスは、作品以後に再開される戦いの中で死ぬことになるが、アキレウスにとってはそれが「不滅の名誉」の条件である。彼はそうした運命を抱えているからこそ、同じ人間という立場から、一時的であれ仇敵の父と和解を果たすことが可能になった。

18 歌において、アキレウスが自ら語った「優れた名誉」(κλέος ἔσθλόν 18.121) は、直接には 20 歌以降における武功、とりわけ 22 歌におけるヘクトールの打倒を指すものであるが、これは自らの死を伴うもの、すなわち「不滅の名誉」(κλέος ἄφθιτον 9.413) であった。アキレウスの武功の前後にあるものは、自らの命に相応しい名誉を求める自身の葛藤と、自らの死が迫る中で果たされたプリアモスとの和解である。これら二つは「不滅の名誉」に包含されつつ、いずれもアカイア勢という社会からは外れた空間で生じている。更に、「不滅の名誉」の条件としてアキレウスに提示された、自らの死という運命と深く関わるものである。

作中における詩行の終わりで κλέος ἔσθλόν (優れた名誉) の語が動詞 ἄγνυμαι (得

²⁸ ゼウスの発言の中では、この「栄光」は、アキレウスが遺体の返還と引き換えに受け取る身の代の品々を指すとも考えられるが、これを更に彼が示した雅量と解釈するものとしては Macleod (1982), p.99, 川島 (1991), 242 頁、同 (2023), 66-67 頁。

²⁹ そのような場でアキレウスは本来の人間性を取り戻したと論じられる。小川 (2021), 224-225 頁。

る)と合わせて用いられるのは、以上の箇所(5.3,273,18.121)のみである³⁰。ここでは、「優れた名誉」を「得る」ことがディオメーデースとアキレウスの両者に特徴的な偉業として対応させられることで、却って両者の対比が明確にされている。ディオメーデースの「優れた名誉」が、アカイア勢という社会の内に留まった戦士の武功であるのに対し、アキレウスのそれは、アカイア勢という社会の外と深く関係し、更に作中社会の外に強く働きかけるものとして示される「不滅の名誉」であった。また、ディオメーデースとアキレウスそれぞれの武勇譚の間にあり³¹、かつ両者の対照性が一層鮮明になる9歌において、ディオメーデースの「優れた名誉」がアキレウスの「不滅の名誉」と対応させられることによって、両者の名誉の性質が対比されると共に、ディオメーデースとは異質な物語を担うアキレウスの英雄像が際立たせられていると言える。

第3章 デイオメーデースの非難

9歌終盤においては、ディオメーデースが初めて直接アキレウスを非難する発言を行い、称賛を受ける。本章においては、このようなディオメーデースの演説がもたらす効果、更に今後の物語における意義について考察する。

第1節 アキレウスの孤立とディオメーデース

アキレウス和解拒否の報が届くと、並み居る諸将は沈黙して悲しみにくれてしまう(9.693-695)。しかし、時が経ってからディオメーデースが再び演説する。

Ἀτρείδη κύδιστε, ἄναξ ἀνδρῶν Ἀγάμεμνον,
μὴ ὄφραλες λίσσεσθαι ἀμύμονα Πηλείωνα
μυρία δῶρα δίδους. ὁ δ' ἀγῆνωρ ἐστὶ καὶ ἄλλως·
νῦν αὖ μιν πολὺ μάλλον ἀγνοροῖσιν ἐνήκας.
ἀλλ' ἦτοι κείνον μὲν ἐάσομεν, ἢ κεν ἦσιν
ἢ κε μένηι. τότε δ' αὖτε μαχήσεται, ὅππότε κέν μιν
θυμὸς ἐνὶ στήθεσσι ἀνώγηι καὶ θεὸς ὄρησι. 697-703

最も栄光あるアトレウスの子、人々の王アガメムノンよ、

³⁰ Cf. Edwards (1991), p.162. また、詩行前半まで含めたものとしては、エウボルボスの発言に τῷ μεῖα κλέος ἐσθλὸν ἐνὶ Τρώεσσιν ἀρέσθαι(17.16)とあるのみである。κλέος ἐσθλὸνの語自体も、他は17.143, 23.280にしか現れず、後者について、Westはκλέοςの代わりにσθένοςの読みを採用している。

³¹ 9歌の使節派遣を中心とした物語構造についてはWhitman(1958), p.257.

あなたは無欠なるペーレウスの子に嘆願などせねばよかった、
無数の贈物を与えて。奴はそうでなくとも尊大なのだ。
あなたは今、遙かにひどく奴を尊大な振る舞いの中へ送ってしまった。
だが我らはともかく、あの者のことは放っておこう、行ってしまおうとも、
留まろうとも。奴は再び戦うことになろう、いつであれ
胸中の心が命じ、神が駆り立てるときには。

アガメムノーンを頂点とする社会を肯定し、その価値体系を自明のものとするディオメーデースにとって、飽くまでその社会への参入を拒むアキレウスは「尊大」(ἀγήνωρ)としか映らなかった。ディオメーデースはもはや彼の動向に関心を持たず、具体策の提案に移る。すなわち、皆に食事を摂って眠るよう勧めた後、アガメムノーンには早朝軍勢を激励し、自身も先鋒で戦うよう述べる(704-709)。この演説を諸将はまたも喝采して迎え、再び「馬を馴らすディオメーデースの言葉に感嘆して」(μῦθον ἀγασσάμενοι Διομήδεος ἵπποδάμοιο 711) という詩行が現れる。かくして、社会的空間におけるディオメーデースへの称賛が再び示され、ここにもやはりアキレウスとの対照性が見出される。加えて、今回はそのアキレウスを直接非難する形でディオメーデースが称賛を得た点に大きな特徴がある。ディオメーデースとアキレウスはこれまでも社会の内/外に置かれた存在として様々な相違を見せてきたが、この場面では、それに一つの帰結が与えられることになった。このように、「アキレウスの怒り」という物語の中に置かれたディオメーデース像が、戦士たちの社会から外れてゆくアキレウスの姿を対比的に強調している。

ディオメーデースは、アキレウスが名誉を奪われたことで社会から離れてゆく中、飽くまで戦場や集会での名誉を追求し、これまでの戦闘においてアカイア勢最大の奮戦を見せた。彼は、そこでアキレウスと対応する役割を果たしながらも、彼とは異なる英雄像を示していた。そのディオメーデースが、和解を拒否したアキレウスを非難し、称賛を受けたことで、アキレウスの社会的孤立が強調された。加えて、戦闘で得られる名誉をめぐるアキレウスの葛藤をよそに、更なる戦闘へと諸将を扇動した。かくして、最強の戦士であるはずのアキレウスが、誰からの理解も得ることなく、戦士によって構成される社会の周縁に留まらざるを得ないという状況が、一時的ではあるが固定化した。それを決定付けた存在がディオメーデースであった。

加えて、ディオメーデースがアキレウスを非難し、称賛を受けたのは、アキレウスが「不滅の名誉」(κλέος ἄφθιτον 9.413) について言及し、作中の社会を遙かに越えていく規格外の英雄像が現れたのと同じ段階においてであり、これによって両者の異なる在り方が一層強く示された。これも社会の内/外に置かれた両者の相違と対応すると共に、作中社会で無理解に遭ったアキレウスの生涯、すなわち「不滅の名誉」の、作品外に強

く働きかける側面を際立たせるものであった。

ディオメデースとアキレウスは、それぞれ近似の武勇を誇り、戦場においては対応する役割を果たしているが、両者の英雄像は大いに異なっている。むしろ、両者が類似の要素を有することで、却ってその程遠い関係が顕著に表れていると言える。彼らの近さと遠さというこの二重の関係によって、英雄のそれぞれの個性が際立ち、物語の展開が効果的なものとなっている。

第2節 続く物語との関わり

この演説の前後に関しては、9歌冒頭(29-31, 50-51)と同様であるか、類似の詩行が用いられている。いずれもアカイア勢が沈黙する中、時が経ってから彼が演説し、皆の喝采を浴びる、という定型場面であり、7歌における彼(7.399-404)にも見られるものである。しかし、今回の演説は、ディオメデース自らが具体策の提案まで行っている点で以前のそれとは異なっている³²。他二つの場面でその役割を担ったのはそれぞれアガムノンとネストールであった。

ディオメデースの提案は、11歌におけるアガムノンの奮戦につながるものの、アカイア勢は苦戦し、ディオメデースもパリシに矢を射られて撤退する。このときのディオメデースについて、Andersen(1978)は、アキレウスすら敗れた敵に対し重傷で済んだことが特別な名誉であると肯定的である³³。しかし、作中のディオメデースはこれ以降戦闘を行うことが不可能になっている。9歌では、ディオメデースの在り方を通じてアキレウスの悲劇性が強調される一方で、ディオメデース自身も、自らの栄光となった演説が、翌日の敗北を招来することになった。このようにして、戦場で社会的名誉を得るといった戦士の本質が不安定であることが、他ならぬディオメデースにおいても示されていると言える。更に、同日の戦闘において、パトロクロスの参戦と死が生じることで、物語はいよいよアキレウスの参戦に至ることになる。

おわりに

本稿では、9歌におけるディオメデースとアキレウスに関して、両者がそれぞれアカイア勢という社会の内/外に置かれているという視点から考察を行った。その結果、名誉をめぐる両者の効果的な対比が見出された。これによって、従来見逃されていたディオメデースの役割が明らかになると共に、アキレウスの特異な英雄像が際立ち、「怒り」の物語における彼の名誉の在り方が対比的に示されたと思われる。検討結果は以下

³² Andersen (1978), p.122, West (2011), p.232.

³³ Andersen (1978), p.138.

のようにまとめられる。

9 歌冒頭におけるディオメデースの発言 (9.46-49) は、16 歌におけるアキレウスのそれ (16.97-100) と対応し、両者はいずれも「我ら二人」がトロイア攻略する、と述べている。しかし、ディオメデースが「集会」(ἀγορή) という社会的な空間において、「我ら二人」だけでもトロイアを攻略すると発言して「栄光」(κῦδος) を得る一方、「怒り」の中にあるアキレウスは、パトロクロス一人に対して、敵味方の社会全てが滅んだ上で「我ら二人」だけがトロイアを攻略したいと語っており、「絶対の栄光」を求めている。以上は、アカイア勢という社会の内／外に置かれた両者の相違が発言の表面的な対応によって明確にされたと言えるもので、「集会」などの社会的空間で活躍するディオメデースと、「怒り」によって社会から遠ざかるアキレウスというこれまでの対比を一層強めるものであった。

9 歌中盤においては、アキレウスが、アガメムノーンを頂点とする社会では自らの武功が正しく報いられることはないとして、アガメムノーン体制下の「分け前」による不安定な名誉 τιμή の在り方を否定している。これはディオメデースが体現する英雄像とは正反対のものであった。また、アキレウスが自身の戦死によって得るものは「不滅の名誉」(κλέος ἄφθιτον) であるとされ、これがディオメデースの「優れた名誉」(κλέος ἐσθλόν) と対応させられることで、両者の英雄像や名誉の性質をめぐる対比がなされている。ディオメデースの名誉 κλέος が戦場という「社会的」空間における実体的価値の獲得であるのに対し、自らの命と引き換えのものであるアキレウスの名誉 κλέος は、プリアモスとの和解などを包含し、アカイア勢という社会から外れた空間と深く関わっている。これは「不滅の」(ἄφθιτον) と形容されているため、実体的価値としての次元に留まらず、作中社会の外にいる「後代」の聴衆に働きかけることで成立するという、物語としての性質が強調されたものであった。

9 歌終盤においては、ディオメデースが、アガメムノーン体制に復帰しようとしないうアキレウスを「尊大」であるとして直接非難し、翌日の戦闘準備を勧める演説を諸将の前で行っている。この演説もやはり称賛を得ることになり、アカイア勢という社会の内／外に置かれた両者の対比が更に明確化されると共に、この対比に基づく物語展開に一つの帰結が与えられている。このような形で、アキレウスの社会的孤立が強調されると共に、作中社会の外に働きかける性質が強く現れる、彼の「不滅の名誉」が際立たせられている。また、称賛を受けたディオメデースに関しても、翌日の戦闘で負傷する運命にあり、これも社会の内にある戦士の不安定な本質を示すと共に、アキレウスの出陣という作中の大きな出来事に物語を動かしてゆくものであった。

参考文献

- 小川正廣『ホメロスの逆襲：それは西洋の古典か』名古屋大学出版会、2021年、「第4章 ホメロスの時代と叙事詩のヴィジョン——『イリアス』をめぐる——」192-227頁。
- 川島重成『「イリアス」ギリシア英雄叙事詩の世界』岩波書店、2014年（初版1991年）。
- 同『ホメロス叙事詩の世界——『イリアス』と『オデュッセイア』——』ピナケス出版、2023年。
- 梶茂一（訳）『ホメーロス イーリアス 上』平凡社ライブラリー、2003年、岩波文庫版三巻本（初版1953、56、58年、改版1964年）の復刻、再編集版。
- 同（訳）『ホメーロス イーリアス 下』平凡社ライブラリー、2003年、同上。
- ジョン・グールド『「イリアス」における社会の観念』葛西康德訳、『法政理論』27、1995年、298-322頁。
- 松平千秋（訳）『ホメロス イリアス（上）』岩波文庫、1992年。
- 同（訳）『ホメロス イリアス（下）』岩波文庫、1992年。
- Andersen, Ø., *Die Diomedesgestalt in der Ilias*, Symbolae Osloenses Vol. Suppl. XXV, Oslo: Universitetsforlaget, 1978.
- Edwards, M. W., *Homer: Poet of the Iliad*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1987.
- Id., *The Iliad: A Commentary Volume V: books 17-20*, Cambridge: Cambridge University Press, 1991.
- Erbse, H. (ed.), *Scholia Graeca in Homeri Iliadem vol. II*, Berlin: de Gruyter, 1971.（古注）
- Gould, J., “The Idea of Society in the Iliad,” in: Gould, J., *Myth, Ritual, Memory, and Exchange: Essays in Greek Literature and Culture*, Oxford: Oxford University Press, 2001, pp.335-358.
- Griffin, J., *Homer on Life and Death*, Oxford: Clarendon Press, 1980.
- Id., *Homer: Iliad Book Nine*, Oxford: Clarendon Press, 1995.
- Hainsworth, B., *The Iliad: A Commentary Volume III: books 9-12*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Janko, R., *The Iliad: A Commentary Volume IV: books 13-16*, Cambridge: Cambridge University Press, 1992.
- Lohmann, D., *Die Komposition der Reden in der Ilias*, Berlin: de Gruyter, 1970.
- Macleod, C. W., *Homer: Iliad Book XXIV*, Cambridge: Cambridge University Press, 1982.
- Most, G. W. (ed.), *Hesiod: Theogony, Works and Days, Testimonia*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2006 (Loeb Classical Library).
- Nagy, G., *The Best of the Achaeans: Concepts of the Hero in Archaic Greek Poetry*, revised ed., Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1999 (1st ed. 1979).
- Id., *The Ancient Greek Hero in 24 Hours*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2013.

- Pratt, L., "Diomedes, the fatherless hero of the Iliad," in: Hübner, S. R. & Ratzan, D. M. (ed.), *Growing Up Fatherless in Antiquity*, Cambridge: Cambridge University Press, 2009, pp.141-161.
- Redfield, J. M., *Nature and Culture in the Iliad: The Tragedy of Hector*, expanded ed., Durham, NC: Duke University Press, 1994 (Chicago: University of Chicago Press, 1975).
- Schein, S. L., *The Mortal Hero: An Introduction to Homer's Iliad*, Berkeley: University of California Press, 1984.
- Taplin, O., *Homeric Soundings: The Shaping of the Iliad*, Oxford: Clarendon Press, 1992.
- West, M. L. (ed.), *Homerus Ilias, Volumen Prius: Rhapsodiae I-XII*, Stuttgartiae: B. G. Teubner, 1998. Editio Stereotypa, Berlin: de Gruyter, 2011 (Bibliotheca Teubneriana).
- Id., *Homerus Ilias, Volumen Alterum: Rhapsodiae XIII-XXIV*, Monachii: K. G. Sauer, 2000 (Bibliotheca Teubneriana).
- Id., *The Making of the Iliad*, Oxford: Oxford University Press, 2011.
- Whitman, C. H., *Homer and the Heroic Tradition*, New York: W. W. Norton & Company, 1958.